

特集 「セーフスペース」を考える

6面 中高YWCA全国カンファレンス
7面 ひろしまを考える旅2017

The Young Women's Christian Association
YWCA

(第32総会期主題聖句)
平和を実現する人々は幸いである
一マタイによる福音書5章9節
(日本YWCAの使命(ミッション))
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む
(日本YWCAのビジョン)
地域で女性達が主体的に活動することを通して、
以下の社会をめざします。
(1)平和憲法が生まれ、核も暴力もない社会
(2)女性と子どもの尊厳を守る社会
(3)若い女性がリーダーシップを発揮する社会
(4)多世代・多文化で多様な背景を
持つ人びとを尊重する社会

10
OCTOBER
2017
No.740

www.ywca.or.jp



神戸YWCA

Safe Space
.....

ありのままの自分で
いられる

YWCAの
「セーフスペース」

誰もが安心して「ありのままの自分」でいられること。それが、平和への
はじめの一歩だとYWCAは考えています。しかし、日常の身近な場やコ
ミュニティで、ありのままの自分は難しく、生きづらさを抱えている人
は少なくありません。全国各地のYWCAは、一人ひとりが安心して自分ら
しくいられる場を「セーフスペース」として、地域や学校で展開しています。
地域社会で「居場所創り」の必要性が高まる今、
改めてYWCAの「セーフスペース」を考えます。

平和な世界への一歩は
私らしく生きること

YWCAは創立当初から平和な世界を
創り出すために、女性たちがリーダーシ
ップを発揮してきました。しかし、いまなお
多くの人々が、偏見、差別、虐待、抑圧、
排除、暴力にさらされています。家庭や
職場、学校などの身近な人間関係や、コ
ミュニティの中で口には出せない痛みと生
きづらさを抱え、自らの潜在的な力や可
能性に気づくことができない人もいます。

2011年、世界YWCA総会は「女性が
創り出す安全な世界」をテーマに掲げま
した。「安全な世界」とは、人権と自由が
保障され、一人ひとりがその人らしく生
きることができる世界です。YWCAが展開
する「セーフスペース」では、一人ひとり
が失われた尊厳を回復し、元気を取り戻し、
立ち上がって声をあげることができます。
誰もが自分の人生を自らの意志で決め、
リーダーシップを発揮するためにも「セー
フスペース」は必要不可欠なのです。



名古屋YWCA



京都YWCA



日本YWCA



種

イエスは言われた。「心を尽くし、精神を尽くし、思
いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」
これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じ
ように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」

マタイによる福音書22章37-39節

「私らしく生きよう」。中高YWCA全国カンファレンス(6面)
で行われたワークショップのタイトルです。講師を務めた平良愛香
牧師が作詞、作曲した賛美歌「主につくられたわたし」の歌詞で
もあります。「わたしらしく生きよう 自由に生かされて おと
ならしくでもなく こともらしくでもなく……」。まだまだ自分
が何者であるのか、未知であるけれど多くの可能性をもっている時
期に、全国の仲間と共にさまざまな問題を通して、自分と向き合
う時間はとても貴重なものです。

「隣人を自分のように愛しなさい」という聖句は「隣人愛」と
して、とても有名です。でもその大前提の「自分を愛する」こと
がきちんとできているでしょうか。おとなである私たちができない
と、子どもたちに示すことができません。

いま、私たちが生きる社会を見渡せば、私らしく生きることが
難しいことがあるかもしれません。しかし、どのようなときでも
仲間や聖書が、自分の良心に従って生きることへの勇気と希望を与
えてくれるでしょう。「隣人を自分のように愛しなさい。」と語る
聖書の言葉に近づくために、日頃から自分を「よし」と思える気
持ちは高めるように、少々なことでは挫けない強い心を持つことが
できるように、「わたしを造られた神」がいることを覚え、応える
ために、生きていきたいものです。

中高YWCA委員会委員長
松原恵美子
ブルー学院中高YWCA顧問

ご協力ありがとうございます

- 賛助費
古西正子 森 豊 秋元靖子
山田純子 渡邊順子 具島美佐子
飯島康江 岸田昌子 横山千枝子
大田玲子 安倍孝子 赤石めぐみ
諏訪昭子 毛利亮子 近藤真由美
小泉進子 永山峰子 富田なおみ
水野雅子 桐井明保 八重樫照代
河村双葉 桃井明男 三木ケン子
吉田紀子 寺山朝子 大見川昭子
中村紀子 福島和子 吉野かおり
宮澤玲子 福和子 兼子佐与子
金剛静恵 古川道子 井澤須美子
三宅文子 和田崇子 桑原真由美
鎌原恵子 齋藤孝子 上村愈巴子
辻 加代 吉田光代 馬山貴美子
花盛静子 安江惠津 清水佐和子
本城智子 阿武桂 伊吹由歌子
江崎啓子 鈴木孝子 鳥海百合子
布村彰子 三宅純子 小野小夜子
白田治子 池上幸子 佐竹美美子
首藤和子 中橋美鈴 原田由美子
青木恵子 汐崎康子 長尾眞理子
庄子泰子 松岡信子 山本眞佐子
岡野 峻 伊藤 優 山本眞佐子
遠藤洋子 大村直子 渡辺真知子
村松幸子 望月和子 石橋さなえ
石川玲子 野田雅子 川浪希比子
今石牧子 片山 穂 伊藤いり代
飯島敦子 田中 謙 武内富貴代
陶山義雄 井出 都 大澤恵美子
伊藤眞代 伊藤眞代 杉田佐紀子
俣 恭子 外崎弘子 大工原則子
星野花枝 平井純子 坪田未沙子
坂内義子 井口 規 露木美奈子
汐崎貞子 西村律子 仁科謙太郎
水野遼子 三宅香織 松川ユカリ
山岡清一 森川伸子 伊藤まさこ
白木原晴子 田村三保子 富岡美知子
中平多恵子 山本貴美子 泉谷五十鈴
ピエスメーカーズ募金
(平和を創り出す女性のリーダーシ
ップ養成)
犬伏邦明 井上玲子 津戸真弓
毛利亮子 芳我秀一 都木恵子
宮澤玲子 古川道子 齋藤孝子
辻 加代 鈴木裕子 白田治子
青木恵子 梅林宏道 横山千枝子
中村安子 鈴木 榮 伊吹由歌子
浅田和美 俣 恭子 伊藤いり代
小村明子 小澤智子 若林有美子
田村三保子 山本貴美子
敬和学園大学
災害時支援募金
(国内外の災害被災者支援)
西田悦子 秋元靖子 横山千枝子
大伏邦明 和原崇子 近藤真由美
毛利亮子 田村三保子 八重樫照代
齋藤孝子 江崎啓子 海老原智子
白田治子 首藤和子 松村ユカリ
石山逸子 青木恵子 友田シズエ
秋山幸子 俣 恭子 田村三保子
落合洋子 小村明子 田村三保子
匿名
(オリブの木キャンペーン募金)
西田悦子 犬伏邦明 阪本和子
桑原昌三 桃井明男 中村紀子
横山眞子 齋藤孝子 齋藤孝子
辻 加代 野澤節子 鈴木裕子
白田治子 遠藤光起 庄子泰子
伊藤 優 小林征子 横山千枝子
川上 哲 井出 都 重松よし子
俣 恭子 清水 南 竹田とし子
谷山幸子 小村明子 友田シズエ
田中良明 佐々木寛 田村三保子
匿名
(バレスチナYWCA
「難民キャンプにおける子どもの
ためのプログラム」支援)
日本YWCA
日本YWCA
世界折衝日集會
東日本大震災被災者支援募金
西田悦子 犬伏邦明 大田玲子
柴田幸子 島田由香 具島美佐子
桃井明男 都木恵子 加納美津子
広瀬健一 宮澤玲子 高橋りえ子
吉野恵子 古川道子 上村愈巴子
和田崇子 齋藤孝子 馬山貴美子
辻 加代 安江惠津 中西トク子
江崎啓子 白田治子 長尾眞理子
青木恵子 庄子泰子 中村とし子
村松幸子 折戸和子 多喜百合子
石川玲子 井上裕美 竹田とし子
井出 都 俣 恭子 伊藤いり代
汐崎貞子 小村明子 武内富貴代
若林有美子 下末かよ子 田村三保子
山本貴美子 榎本みづ枝 小野小夜子
デイエゴ・カエターノ 田辺いつみ
希望をつなぐコンサート実行委員会
日本聖公会留米キリスト教会婦人会
(2017年6月16日〜8月15日
現在敬称略)

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03-3292-6121 Fax.03-3292-6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp
編集発行人 実生律子/偶数月1日発行

旬な情報発信しています | メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp | お名前を送ってください / フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp 無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。

Safe

point 4

人と人の間に お互いを尊重し対話しよう

「セーフスペース」では、与える・受けるの関係ではなく、対等な人と人との関係性を育んでいくことも重要です。支援事業に生じがちな「支援する・される」、「指示する・される」という関係性を取り除くことで初めて、そこにいる誰もが対等になり、お互いを尊重する「対話」が生まれます。お互いに目の前の相手の声に心を傾けて対話をするを通して、隠されていた思いやニーズに気づかされることがあります。活動に関わる人すべてが、その「気づき」によって変えられ、成長することを通して、「セーフスペース」も日々変化し、成長していくのです。

京都YWCAの「ふれあいの居場所食堂うららかふえ」では、そこにいる一人ひとりを受け止め、対話する人たちがいます。併設する高齢者住宅や自立支援ホームの利用者、そしてカフェの利用者が、人との関わりを積み重ねる場となっています。

各地のYWCAで行われているキャンプには、子どもたちと同じ目線で向き合い、寄り添うリーダーたちがいます。また、保育園、発達支援のニーズのある子どものための療育事業では、どんなときにも子どもの気持ちに耳を傾けて、最後まで話を聴く先生たちがいます。東京YWCAまきば保育園では、「ここは、もう一つのお家のように安心できる場所であるということ、自分の気持ちを出して良いということ、自分の心地良いペースで歩んで良いということ、誰かがいつも見守ってくれている場所であるということ」を子どもに伝えながら保育をしています。



日本と韓国の若い世代が出会い、国や文化、背景の違いを超えて、ともに語り、学びあう「日韓ユース・カンファレンス」(日本YWCA)



日本語を母国語としない子どもたちの学習サポート&居場所。「違ってOK」「違いを楽しむ」という姿勢で、子どもたちのありのままを受け入れている「がり勉クラブ」(名古屋YWCA)

point 3

開かれている 違いを認め、受け入れ合おう

「どなたでもどうぞ」と掲げながら、仲間うちだけの「居心地のいい居場所」ではあっても本当の意味で「セーフスペース」とはいえません。初めてそこを訪れた人が「ここは私にとって安心できる場」と思えるのは、「受け入れられている」と実感したときです。国や文化、性別、世代、生活環境や社会的立場、経済的背景、価値観など、あらゆる「違い」を受け入れ、尊重すること。これは、「セーフスペース」を実現するための条件の中で、もっとも難しく、そして大切な要素です。

YWCAのすべての活動は、「キリスト教基盤」に基づいています。それは、「わたし」も「あなた」も神の前に等しく大切な存在ということを信じることです。また、すべての「違い」を乗り越えて隣人を愛したイエス・キリストの生き方に、常に学び続け、時には変化も恐れなことです。「セーフスペース」は、このキリスト教基盤の上に立って運営しようという心がけています。



Space

知る 創る

セーフ スペース

ポイント
points

「セーフスペース」を創り、成長・継続させるためにYWCAが大切にしていることを6つのポイントで紹介いたします。これは日常のあらゆる場やコミュニティで用いることができます。それぞれに与えられた賜物やチカラを発揮して、共に新たな「セーフスペース」を創り出してみませんか。

point 2

いつでも、どこでも 多様なカタチで創り出そう

そこに集う誰もが安心して「ありのままの自分」でいられることが保障されていれば、YWCAのどんな場も「セーフスペース」といえるでしょう。たとえば施設や事業、プログラム、普段の委員会やグループ活動、皆で美味しいものを囲んで語るひとときなど。それは、必ずしも特定の場所・空間である必要はありません。何もないところにも、新たな「セーフスペース」を創り出すことができます。

大勢で連日宿泊するプログラムでは、施設の一角を「セーフスペース」として開放することがあります。今年の中高 YWCA 全国カンファレンスでは、宿泊ホテルの1室に「しんどくなったらいつでもどうぞ」と掲げた「セーフスペース」が設けられました。「いつでも、どこでも」多様な形で新しい「セーフスペース」を創り出すことができるのです。



point 1

信頼関係 安心を保障するルールを共有しよう

普段は口に出せない「本当の声」で語り合えるのが「セーフスペース」です。しかし、プライベートな体験や悩みは、信頼関係なしには安心して打ち明けることはできません。「セーフスペース」を初めて訪れる人が安心できるよう、そこに集うすべての人のプライバシーや人権を守る「ルール」を設けることが前提となります。「今日のお話は、ここだけのお話」(守秘)、「いろいろな背景を持つ人がいること」(多様性の理解)、「自分と異なる人を否定しないこと」(肯定・受容)、「なんでも話していい」「話したくなければ話さなくていい」(尊重)といったルールを共有することが、信頼関係の土台となります。



ボランティアの高校・大学生が中心となって福島の親子支援キャンプを運営。さまざまなものを認め合い共に生きる場を創り出している(熊本YWCA)



中高生と20代前半の女性が、一緒に楽しくリーダーシップを学ぶ講座。さまざまな課題に出会い自分の中にある多様な力をのばしていく「ガールズ・パワーアップ・プロジェクト」(大阪YWCA)



食事を作るボランティアや子ども支援のサポーターら地域の人々に支えられている「大手町の小さなキッチン わいわい食堂」。子どもたちも積極的にお手伝い(広島YWCA)

知る
創る

セーフ
スペース
6 points

ユースが考える 「セーフスペース」

私をそのまま 受け入れてくれる場所



初めて参加した「ひろしまを考える旅」。
オプション最終日はみんなで好み焼き

高校時代にYWCAに参加したことで「セーフスペース」を知ったというユース会員が、自身の体験をもとに今回のテーマについて考えました。海外のYWCAプログラムに参加したことで視野を広げた彼女の意見は、私たちが「セーフスペース」創りを実践するためにも役立つでしょう。

「窮屈だった高校生活で初めて息ができた感じ」
YWCAの良さとは何でしょうか。日本YWCAの「ひろしまを考える旅」に初めて参加したとき、高校生だった私は閉鎖的な学校の中で窮屈な思いをしていて、自分の考えを人前で発表する機会に飢えていました。YWCAでは、そんな私を「高校生だから」ということで見下すことなく、一人の意見として尊重して、年上の参加者と対等に扱ってもらえました。こうした環境は私にとって本当に貴重で、高校生活の中で初めて息ができた感じがしました。
「肩書や見た目でジャッジされず、存在をそのまま受け入れてくれる場所」。それが私にとっての「セーフスペース」であり、他のボランティア団体ではなく、このYWCAに居たいと思う理由だと思っています。
今年の3月に参加したCSWでも「セーフスペース」が部屋として設置されました。その部屋で世界YWCA総幹事のマラヤ・ハーバーさんは、一人ひとりのメンバーに寄り添って発言しやすい状況、そして英語を流暢に話せなくても誰もがその場に居やすい雰囲気を作り出していました。CSW参加後の私の目標が「自分の周囲の人間に対して『セーフスペース』を創る」になったほどです。しかし、そんな私でも「セーフスペース」という概念は知っているものの、どのよう

に創ればいいのかからず、YWCAに関わる中での活動のゴールも明確ではありませんでした。そんな折、インドYWCA主催のユースフォーラムが「セーフスペース」をテーマに開催されることを知って、参加しました。
「イメージの異なる「セーフ」をともに創り出すために」
「セーフスペース」とは私の認識していた以上の意味を持っていました。「身体的・精神的に不安を抱えない空間」であることは共通しています。その定義やイメージは人によって違います。例えば、自分が通う大学全体を「安全な場所」と認識している人もいれば、大学の中のトイレの1室でしか安心を感じられない人がいるように。
フォーラムでは、「どんなときにセーフだと感じるか」を思い浮かべ、発言していくセッションがありました。それは国や文化によっても違いましたが、同じ文化を共有している私と皆さんも感じ方は異なるのではないのでしょうか。では、イメージが異なりながらもお互いに「セーフスペース」と感じるには、それを創り出すには、どうすればいいのでしょうか。
それは、どんなに自分と「違う」他者であっても一人ひとりの目を見て、その人を心から知るうとする努力をすること。考えを共有したくなるような雰囲気を作ることなのだと思います。え？そんな基本的なこと？



インドYWCAのユースフォーラムで「セーフスペース」について語り合った各国のユースたち

point 6

参加者から参画者へ 自分を取り戻して立ち上がる

そこを訪れた人が自分らしさと元気を取り戻し、立ち上がり、主体的に動き出すようになるのも、「セーフスペース」のチカラです。また、日常の場に戻っても自分自身のチカラを必要とされる場で活かせるようになったり、リーダーシップを発揮して新たな活動を始めたりするなど、「セーフスペース」のチカラはその場に留まることがありません。

身近な人間関係で息苦しさを感じてYWCAに参加したことで、ありのままの自分が受け入れられ、自分らしく活動できたことによりエンパワーされる。そして、自ら立ち上がり、同じような痛みを抱えている女性たちに寄り添う。YWCAにはそうしたリーダーシップのストーリーがたくさんあります。

Safe Space



世界に変革をもたらす若い女性のリーダーシップを実現するため、YWCAは、それぞれの国や地域で求められている「セーフスペース」を創り出している（世界YWCA総会）

CSWに参加したユースが「セーフスペース」を体験！

国連女性の地位委員会（CSW）は2週間続くので、途中「ゆったりしたい、ぼーっとしたい」という気持ちになりました。そんな時に惹き付けられるように立ち寄っていたのが、世界YWCAが滞在ホテルの一室に設置した「セーフスペース」。CSWに参加する若い女性が自由に利用できるアットホームでウェルカムな場所。特に若い女性のためのスペースとしたのは、女性の人権向上をめざす場であっても、往々にして年上の女性や男性が議論の中心を占め、若い女性の意見が尊重されてこなかったことが背



point 5

地域・外部との連携 スペシャリストのチカラを借りよう

地域とのつながりも大切です。函館YWCAでは、福島在住の親子を対象にした保養プログラムを継続的に実施するために、地元の人々や企業、施設などに協力を依頼するほか、地元の新聞を通じて活動を広く伝え、支援を呼びかけるなど工夫をしています。

また、「セーフスペース」がニーズに応え、息の長い活動となるには行政、医療、他の福祉施設や専門家との柔軟な連携が必要となるでしょう。広島YWCAの「大手町の小さなキッチン わいわい食堂」は、ひとり親家庭などの小中学生を対象に、子どもと親が安心して集い、気軽に交流できる居場所として発足。子ども支援の専門家や福祉関係者と連携し、サポーターの育成にも力を入れ、市の補助金を受けています。

大阪YWCAが運営する「ステップハウス」は、DVの被害にあった女性と子どもが安心して生活できる場です。ケースワーカーやカウンセラーら専門家のほか、行政や司法、医療機関、関連団体などのネットワークを築いて、被害者母子の心と体の安全を確保しています。

景にあるからです。ここでは、自主的にイベントやディスカッションを設けてもよし、誰かとおしゃべりしてもよし、寝ころがって過ごしてもよし。ただし、「誰の発言もきちんと聴き、尊重する」という唯一のルールは守ること。「私の意見も平等に聴いてもらえるんだ」と、大きな安心感の中で発言できることが、とてもエンパワリングなのだ気づかされました。イベントのない時間に立ち寄っても世界YWCAメンバーの誰かは常駐し、心からほっと一息つけるスペースとなっていました。



「ひろしまを考える旅」に参加して

ヒロシマの心を学び、次世代へとつなぐ

「ひろしまを考える旅」は、全国の中高大学生を中心に、多世代・多国籍の参加者が、共に広島で平和について考える国際平和教育プログラム。日本YWCAが1970年に「『核』否定の思想に立つ」を掲げ、その実践として翌年から始められ、もうすぐ50周年を迎える。日本YWCAの看板ともいえるプログラムに参加して、その魅力を探ります。

心と体で感じる学び

夏空の下、8月9日から3日間にわたり、「ひろしまを考える旅2017」が行われました。国内外からの参加者と大学生のインターンとボランティアリーダー、委員、職員の総勢約50名が広島に集結しました。今回の旅のテーマは「HIROSHIMAから考える平和の根っこ」。昨年オバマ前米大統領が広島を訪れ、今年7月には唯一の被爆国である日本が不参加のまま国連で核兵器禁止条約が採択されるなど、世界の注目が日本に集まる中での開催でした。

この旅の主眼は何よりも密度の濃い「学び」にあります。参加者は広島平和記念資料館を訪れ、フィールドワークで原爆の碑を巡り、被爆者の証言を聴くことで、想像をめぐらせ、痛みに共感します。被爆の真実に触れ、日本の被害だけでなく加害の歴史とも直面することになります。

ワークショップでは一人ひとりが意見や感想を述べ、最終日にはこれまでの学びを整理して、全員で共有します。



ヒロシマの現実を伝える展示資料に見入っていた

年齢も国籍も異なる人々と共に行動し、多様な考えに触れ、自らの意見を持つことは、若い世代にとっては大きな成長のきっかけとなります。大学生のインターンやボランティアリーダーは、この日まで4カ月かけて、交流会やワークショップを企画し、運営に携わることで、リーダーシップを培います。参加だけでなく参画できることも、この旅の特徴です。



広島平和記念資料館で解説に聞き入る若い参加者

想いをつなぐ旅

英語名「Pilgrimage to Hiroshima (ひろしまへの巡礼)」の通り、参加者は、国内外から広島を訪れ、平和への決意を新たにしてそれぞれの地へと戻っていく「巡礼者」です。この地に暮らす方々は、どのような想いで毎年新たな旅人を迎えてくださるのでしょうか。17歳で学徒動員中に被爆した江種祐司さんは、原爆投下に至るまでの経緯、ご自身の学生時代と被爆直後の体験などを克明に生々しく語ってくださいまし

た。原爆で「人間が人間でない姿」で殺し尽くされ、台風で海に運ばれた亡骸は今なお水底に眠っている、と語ります。

フィールドワークの案内をしてくださった方々は皆「被爆の記憶を風化させず、ヒロシマ(ナガサキ)の心を一人でも多くの人に伝えること、それが使命です」とおっしゃいました。

この夏、福島から初めて参加した大学生の感想です。

「広島を知らない人に、ここで私が見聞きし、感じてきたものを伝えることで、ぜひ考えて、感じとってほしいです。それが、後世にヒロシマを伝えることのモデルになると思います」。

被爆の記憶のバトンを次世代につなぐことで、一人ひとりが「平和を実現する人」となる……。YWCAのミッションを体現しているプログラムだからこそ、半世紀も続き、これからも時代に合った形で継続されていくのでしょうか。

ひろしまを考える旅委員会副委員長 吉田亜希



原民喜の足跡を辿り、被害の記憶に思いを馳せた



中高YWCA 全国カンファレンス 2017 報告

世界につながるいのちのチカラ

8月2日から4日にかけて、「中高YWCA全国カンファレンス」世界につながるいのちのチカラを横浜で開催。中高YWCA加盟校の生徒や顧問など165名が集い、講演会や交流会、フィールドワーク&ワークショップを通して共に学びあいました。

小さな種には大きなチカラがある

1日目の講演を担当してくださったのは、渡邊さゆりさん(日本バプテスト神学校教務主任)。「小さな種は、小さなゆえに枝を張る大きな木に変身する」という聖書のたとえ話を聞いて、私たちに「小さいこと」が必要だと話されました。それは、痛みややぶれ、小さくされた経験が、共感するチカラとなり、痛む人びとの声にならない声、小さな身を体と魂で聴くことができるからです。それがやがて「世界につながるチカラ」に変えられていくと思います。

講演を聴いた一人の生徒の感想です。「ルワンダ共和国で起きた虐殺により」体に槍を刺されて亡くなった女性の話を聞いて悲しくなりました。命は小さいため、集まって守れるようにできたら、差別はなくなるのではないかと思います。誰かのために、小さい者でも大きな心は持っているのだと思います」

出会いがもたらす小さな変化

メインプログラムのフィールドワーク&ワークショップは、次の9テーマを用意しました。①コリアタウン・川崎桜本での出会いとふれあい。②日雇い労働者の街(寄せ場) 寿町に暮らす人びと。③横須賀で基地と平和を考える。④幕末開港の舞台・神奈川宿から続く横浜の歩み。⑤キリスト教女子教育を支えた人々。⑥甚大な被害が出た横浜の関東大震災。⑦国際孤児の養育に尽力した澤田美喜の働き。⑧ジェンダー・セクシュアリティとは何か。⑨音楽を通して自尊心を高める。

各グループに分かれた生徒たちは、横浜の地に刻まれた課題を見て、聞いて、学び、辿り、出会い、対話し、考えました。たとえば、ジェンダー・セクシュアリティについて学ぶグループでは、平良愛香牧師のお話を聴き、セクシュアルマイノリティの人々と失業の危機にある炭鉱労働者との協働を描



全体会で学びの成果を発表

いた映画「パレードによるこそ」を鑑賞してセクシュアリティの多様性について理解を深めました。最初は表情が硬かった生徒も、フィールドワークから帰ると思い思いに経験を語り、参加する前はレインボーカラーの意味を知らなかった生徒も、最終日には6色のレインボーフラッグを掲げていました。三日目の全体会ではグループごとにステージに上がり、図解や寸劇などの方法で学びの成果を発表し、共有しました。その充実した内容に、誠実に学んだことがうかがえました。

希望者の多いグループは抽選になるため、第一希望が叶わなかった生徒もいます。その一人は、「フィールドワークでは、私たちが友だちをからかうつもりで発していた言葉が本人にとっては暴言であることを知りました。とても興味深かったです。第一希望ではなかったけど、自分に合ったところに導かれたと感じました」と、感想を寄せています。

渡邊さんの講演にはじまった3日間、生徒たちはさまざまな場面で「小さいこと」を感じたのではないのでしょうか。フィールドワークで初めて知った痛み、他校の生徒との交流で感じるものもあつたでしょう。多感な時期のこの経験が、他者に共感し、世界につながるチカラになっていくのではないかと、願います。

日本YWCA職員 山口慧子

※6色のレインボーカラーは、セクシュアルマイノリティの尊厳やアイデンティティ、連帯を示すシンボルカラー